

# 島崎藤村の詩の工夫

——構成を中心に——

橋 口 晋 作

島崎藤村の詩は、『文学界』などに公表されたものしか残っていないのであるが、それで見ると、意外に早い時期の作品も形式や構成面では様々な工夫が施されている。本稿では、その藤村詩の工夫を、構成を中心に見て行くことにしたい。猶、本稿でいう構成は、連の組み立てられ方のことである。したがって、一つか二つの連しかない詩については、簡単な言及に止まる。又、対話形式の詩や劇詩は別稿に譲ることにする。

明治二十七年

七月発行の『文学界』第十九号に「蟬」という詩を発表している。この詩は七五調の四連から成る詩である。一連は四行、一行は十二音である。但し、奇数行に対し偶数行は二字下げになっている。

この詩は、第一連と第四連の間に第二、三連が組み込まれた風の三部構成になっている。第一連と第四連は、後半の二行が「…に…て ひとり木梢の影に鳴く」という繰り返しに近い表現によりながら、第一連の「夏の日影」と第四連の「うつる夕日」とを対照させて、全四連で一日の日差しの移ろい、時間の推移を伝えようとしているものようである。第二、三

連は対句で、蝶と蟻とを点出して、蟬に対置する。このようにこの詩は、二種類の繰り返しという単純な表現方法で出来ているが、変わる日差しの中、空と地上で動く蝶や蟻に対して、「木梢の影」と動かず、辺りに声を響かせている蟬を描きだして、意外に味わい深いものになっている。<sup>(註二)</sup>

明治二十八年

七月発行の『文学界』第三十一号に「ことしの夏」という総題で、九篇の詩を発表している。「ことしの夏」という題名は、明治二十七年七月の「蟬」の夏を意識したものであろう。この詩群の中、「新しき星」「若鮎」「蝶と花」「野の花」の四篇は一連だけで成り、「別離」「木曾川の猿」の二篇は二連で成っている。これら六篇の簡単な組み立てから成る詩では、「新しき星」「若鮎」「木曾川の猿」に二字下げが使われているが、二字下げされている行数がそれぞれに異なっている。「新しき星」「蝶と花」「野の花」の三編は、第一、二行が「…あり…あり…にあり」の繰り返しとなっている。「蝶と花」と「野の花」は双子と言って宜いが、もう一つの「新しき星」には字下げの工夫が施されている。このように、二連以下の詩が全体の三分の二を占めているが、藤村は、それらが同一の印象を与えないよう工夫を凝らしている。

さて、この詩群には三連から成る詩が「青草」「芍薬」と二篇ある。この二篇は、「蟬」と同じく七五調、一連四行、一行十二音で、奇数行に対し偶数行が二字下げとなっている。一行十二音と記したが、「青草」の第

三連の第一、第四の二行は七七の十四音である（猶、最終行を十四音にするという方法は、前記「蝶と花」「野の花」の双子篇にある）。「青草」は、第一連と第二、三連の二部構成になっている。第一連は、頭上遙かにある星から花へと対象を下げて来て、人に踏まれる草に焦点を据える。第二、三連は、この草の「きさらぎの春のはじめの朝まだき」時の姿と「夏の半ば」の姿を「わがわづらひ」「わがかなしみ」に絡ませて描いている。この第二、三連は、第三連の表現が終わった後に巻き起こる思いの高まりに向かつて進んで行くのだが、第一連はこの思いの高まりに対応するものが殆ど見えない。従って、「青草」の構成は二部だが、それは序と本題といった姿のものである。この「青草」に対して「芍薬」の方は、第一連は庭に咲いた芍薬を、第二連では散った後、心に咲き出した芍薬のことを、そして第三連ではこの心に咲く芍薬に対して「懼るゝなかれ」という「吾」の呼びかけを記している。これは、第一、二連が物事の展開を叙述したものであるのに対して、第三連が「吾」を芍薬に対峙させて、第一、二連とは別の世界とした二部構成である。しかし、「青草」「芍薬」の二部構成は、ずれはあるが、客観的な説明部と主情的な部分から共になっていると言えそうで、近似した内容と言えよう。

最後に「与作の馬」という二十連の長詩について記そう。この詩も七五調、基本的に一連四行<sup>(注)</sup>、一行十二音という形式である。基本的にことわつたのは、紙面では一行に十二音・十二音の二行に相当する表現が、その間に明白な空間を置きながら、重ねて記されているからである。又、この詩

も最終行下段部のみ七七の十四音になっている。さて、「与作の馬」は、第五連に解説の言葉があり、第四連までが牝馬に出会う以前、第六連からは牝馬の姿を認めてから後という構成になっている。牝馬に出会う以前の四連は、ある夏の朝、与作が馬に秣を飼おうと野に連れ出したことを記す第一、二連と、牝馬に出会うまでは主人に従順な馬であったことを描く第三、四連の、同量の二つの部分から成っている。次に、牝馬と出会って以後であるが、与作の手を放れるまでの七連とそれ以後の八連に分けられようか。与作の手を放れるまでの七連は、与作の馬と牝馬が相手を認め合つて、嘶き交わしたことを記す第六、七連、与作の馬の変貌を描いた第八、九連、主人与作を無視し、放れようとする姿を描く第十連から第十二連までの三つの部分から成っている。与作の手を放れてからの八連は、牝馬を慕って行く姿が画工の筆も及ばず、「もろこしの歌人」が「天馬」と詠じた姿ではないかと言って、与作の馬の姿を伝えようとする第十三連から第十七連までの五連と、与作の叫びも空しく、牝馬の方に行つて、彼方に消えてしまったことを記す第十八連以下の三連から成っている。このように「与作の馬」は二連又は三連を小さな単位として、与作の馬がある夏の朝、放れ馬になってしまった次第を描く詩である。この間、変貌した馬の姿に焦点を当てている第八、九連と第十三連から第十七連の七連に主題があるうと考えている。「与作の馬」は、事件の経過と焦点という構成が核をなしているのである。

二月発行の『女学雑誌』第四百十九号に、「新婚祝歌」を載せている。

この詩は、七五七七七五の調子で、五連から成っている。一連は四行である。この詩の構成は、第一から第四連までと第五連との二部構成になっている。第一連から第四連は「…君しるや…」という形で四つの物事が並べられている。細かに見ると、この四つは、「…君しるや…を　さらば…にゆきねかし」と繰り返される言葉の多い前三つの物事と、単に「君しるや」のみが共通している最後の物事に分けられる。第五連は、この第一部で取り上げられている四つの物事について、それぞれ一行で評して行くものである。第一から第三までの物事が否定的に評価されるのに対し、第四の「妹背のちぎり」が肯定的に評価されている。

九月発行の『文学界』第四十五号に「草影虫語」の総題で五篇の詩と二篇の短歌体の作品（短歌体の作品は本稿では考察の対象としない）とを發表している。この詩群から第一詩集『若菜集』の所収作品が始まる。この詩群の詩は、「流星」「梭の音」は一連だけ、「かもめ」「昼の夢」「新泉」は二連と、全て三連に達していない。これらの詩は、「新泉」に後述の行下げの工夫が見られるものの、他は行の長さに一定の変化があるだけとなっている。行数の変化は、「かもめ」が四行二連、「流星」が六行一連、「昼の夢」が六行二連、「梭の音」は八行一連、「新泉」が八行二連と、明治二十八年の「ことしの夏」群が奇数行を含んでいたのに対して、偶数行で統

一されたものとなっている。さて、「新泉」の字下げだが、第二、三、七、八行が二字下げ、第五行が六(五)字下げ、第六行が八(十)字下げと高低が著しい。又、「新泉」では第二行の「知るや君かしこに湧ける泉あり」と第五行から八行の「かしこにかしこに　流るゝ泉　…の姿して　君と行かましかの泉」のところが繰り返しになっている。更に「新泉」では、右の工夫の外に、一行の音数の変化という新機軸の工夫も凝らされている。即ち、第一行十七音、第二、三行十二音、第四行十三(十二)音、第五行八音、第六行七音、第七、八行十二音という変化である。このように調べると、「新泉」は、形式の変化が売り物の詩だったのかも識れない。しかし、このあまりにも外形の奇に奔った詩は、『若菜集』には収載されなかった。(注)

十月発行の『文学界』第四十六号に「一葉舟」という総題で全十八篇の詩を發表している。この詩群は、総題の下に「こひぐさ」という八篇から成る小詩群や「哀歌」という「中野逍遙をいたむ」文、逍遙の漢詩九首、藤村詩から成るもの（共に新機軸）まで収めている。この複雑な構成の詩群の中、「雲のゆくへ」は一連だけで成り、「ゆふまぐれ」、「涙」、「こひぐさ」詩群の「其二　狐のわざ」「其四　東西南北」「其七　蓮華舟」「其九　月光」の六篇は二連、又、「二つの声」は二つの詩から成っている。これらの詩の中、「雲のゆくへ」「其二　狐のわざ」の二篇は七五調で一連四行、「ゆふまぐれ」「其四　東西南北」「其七　蓮華舟」も基本的に七五調、

一連四行の詩であるが、「ゆふまぐれ」は第一行が五七五、最終行が七七となつてい、「其四 東西南北」は二連とも第三行が七六、「其七 蓮華舟」は最終行が七七（「其七 蓮華舟」には詩題も付いている）となつている。「涙」も一連四行であるが、第二行が十字、第三行が二字、第四が四字それぞれに下げられてい、第一行から第三行が「あゝあゝ絶えずもあらなん吾が涙 絶えずもあらなん ……ずば」の繰り返しとなつている。又、各行の音数も第一行十七音、第二行八音、第三行十四音、第四行十二音とまちまちである。従つて、「涙」は前出「泉」の工夫を継承した作品である（こちらにも『若菜集』には収載されなかった）。「其九 月光」は八七調であるが、その八音、七音が一行をなした一連八行の詩である。又、八音の奇数行に対して、七音の偶数行は五字下げとなつている。形式の面では、「其九 月光」も「泉」の第五、六行を雛形にしたものに見える。「朝」と「暮」の二つの詩から成る「二つの声」は二連構成の変形と言えようか。「朝」と「暮」の二つの詩は、七五調（最終行は七七）で、共通する言葉（繰り返しに相当）もあり、一対の詩と認められるが、「朝」十四行、「暮」十五行と、意外なところにずれが施されている。

さて、この詩群には三連から成る詩が「秋のうた」「望郷」「天の蝶」、「こひぐさ」詩群の「其三 強敵」と四篇ある。「秋のうた」と「望郷」は連の冒頭が繰り返しの言葉で、残りは七五調四行である（共に最終行は七七）。繰り返しの言葉が、「秋のうた」が「秋は来ぬ」（の繰り返しで）二行（但し、二行目は二字下げ）、「望郷」は「いざさらば」、共に五音であ

る。七五調四行の部分は、「秋のうた」も「望郷」も、第一連の説明的な内容から第三連の感情への没入に向かつて、一連ごとに進展して行つてい<sup>(注五)</sup>る。この展開は、一面で明治二十八年の「ことしの夏」詩群「芍薬」に類似している。「天の蝶」と「其三 強敵」も七五調四行から成っている（以下、七五調、一行十二音、一連四行の詩は、そのことに触れない）。この二つの詩は、第一連と第二連が起承の関係にあつて、花をめぐるある状況が示される。そして、この二つの詩は、起承転（急）という流れをもっていると考ええる。

「こひぐさ」詩群の中の「其一 初恋」「其五 四つの袖」の二篇は四連から成る詩である。この二篇は共に第一連から第三連までと第四連との二つの部分に分けられる。この二つの部分の距離は「其一 初恋」が大きく、初恋のかたみの細道に転じて、過去・現在の時間の差となつている<sup>(注六)</sup>。一方の「其五 四つの袖」の第一連から第三連までと第四連との距離は、条件部と述部という文の成分上の違いに過ぎない。猶、「其一 初恋」は男の息が女の髪にかかるところで終わり、「其五 四つの袖」はそこから始まっているので、「其一 初恋」の発展した段階として「其五 四つの袖」の世界は設定されたように思える。

同じく「其八 逃げ水」は五連から成る詩である。この詩は『新撰讚美歌』「礼拝」第四の替歌であるが、四行にしたり、字下げしたりしたのは、「泉」を継承したのであろう。さて、この五連は第一、二連と残りの三連とに分けられる。第一、二連は「われ」の行動が示され、残りの三連は

「われ」の思いが記されている。その思いは第三連の「こひ」に対する感想から、第四、五連の「われ」の決意へと発展している。<sup>(注七)</sup>

「一葉舟」詩群は十連前後の長い詩が三篇もあるのが特徴である（一連だけの詩が一篇しかないことを考慮すると、印象を一変したと言えようか）。「こひぐさ」詩群の「其六 いきわかれ」が九連、「懐古」が十連、「哀歌」の藤村詩は十三連である。又、「一葉舟」詩群には「望郷」、「こひぐさ」詩群の「其六 いきわかれ」「其七 蓮華舟」に詩題が付いているが、これは「哀歌」の形式に触発されたのかも知れない。さて、右の三長詩は、連想の流れに従って連から連へ展開していると思われ、構成も、この展開を助けるといった程度のものになっている。「懐古」は、第一連が「あめつちの始るとき」で、第十連が現代の「われ」の時である。この間の八連は、二連ずつが一組になって、各古跡に「古」の無いことを認めながら、基本的に時代を下るといふ構成になっている。<sup>(注八)</sup>この構成は、前出「与作の馬」の手法に似ているが、「与作の馬」に認められる主題を負う特別な部分はない。「哀歌」の藤村詩も、内容上は連想に従って展開したものと云う外はないが、連が「かなしいかなや」で始まるものとそうでないものとに分けると、第一連から第四連、第七、八連、第十連から第十三連がそれぞれ「かなしいかなや」で始まる連の部分となっていて、四二二一四という姿が与えられている。しかし、「其六 いきわかれ」には、このような形の上だけの固まりも認められず、連想のままに九つの連が続いているという外ない。但し、「其六 いきわかれ」の最終連第九連は、内容上は冒

頭の第一連に戻るもので、循環形というのがこの詩の構成と言ふべきものなのかも識れない。

十一月発行の『文学界』第四十七号に「秋の夢」という総題で九篇の詩を発表している。「秋の夢」詩群は、四小詩群（但し、「秋」「哀傷」は詩は一篇のみ）から成り、それぞれの小詩群の最初には短歌が置かれている。全て小詩群に属するという体裁は、「秋の夢」の新機軸である。「恋」詩群が五篇で小詩群中最も多いのは、「一葉舟」の傾向（「こひぐさ」詩群）を引き継いでいる。この詩群の中、「恋」詩群の「えにし」は一連だけで成り、「雑」詩群の「白壁」が二連で成っている。いずれも一連四行の詩で、短い詩が少ないのが、「秋の夢」詩群の特徴である。

三連から成る詩も「一得一失」の一篇である。この詩は、第一、二連で「触れやすき君が優しき心」を具体的に挙げ、第三連では、しかし「かくばかりなる吾こひに触れたまはぬ」ことを挙げて、恨んでいる。<sup>(注九)</sup>「一得一失」とは、右のことを突き放して表現したものである。

「雑」詩群の「知るや君」、「恋」詩群の「相思」の二篇は四連から成る詩である。この二篇の中、「相思」は「一得一失」と同じく第一連から第三連までが「われ」の「熱きこころ」を具体的に示したものとなっていて、第四連が、しかし「君」の「涙にはおよばないことを記して、終わっている。最終連が「あゝ」で始まるという形式も「一得一失」に一致する。

「相思」が一連四行、一行十二音、七五調の形式であるの対して、「知るや

「君」は一連三行、第一、二行は七五調十二音であるが、第三行は五音で八字下げという形式になっている。しかも、各連の第三行はこの「知るや君」という五音の繰り返しである。「草影虫語」の「新泉」の第一行が「知るや君……」の繰り返しで、この詩は字下げを多様に試みていた。従って、「知るや君」も「新泉」の工夫を受けた詩ということになる。各連の第一、二行は連想のままに展開していると考えられ、連の固まりは認め難い。<sup>(注七)</sup>これは、「一葉舟」詩群で採られた方法の続きとみて宣かろう。

「恋」詩群の「傘のうち」は五連から成る詩である。この詩は第四連に作者の梅川に対する忠告が入っている。第一連から第三連は梅川・忠兵衛の物語の「歌」、第五連は作者に忠告を受けた梅川の言葉ということになるか。材料は「こひぐさ」詩群の「其五 四つの袖」と同じく近松門左衛門の浄瑠璃に依ったものであるが、鑑賞者のさかしらを挟んで、恋情を際立たせるといふ構成上の工夫が凝らされている。

「一葉舟」詩群と同じくこの詩群も三篇の長詩を収めている。即ち、十連から成る「哀傷」詩群の「母を葬るのうた」、十一連から成る「秋」詩群の「秋風の歌」、二十九連から成る「恋」詩群の「鶏」の三篇である。

「母を葬るのうた」は、七五調、一連四行だが、奇数行が七音、偶数行が五音となっている。又、偶数行は四字下げで、この形式は、「一葉舟」詩群の「こひぐさ」詩群「其八 逃げ水」「其九 月光」に習ったものと考えられる。この詩は、墓に眠る母を労り、慕う方向で展開する第一連から第三連までの部分と、これと対照的に眠り続けるようにと諭す第四連から

第十連までの部分とに分かれる。<sup>(注八)</sup>前の部分の内容と後の部分の内容が対照的なのは、前記「一得一失」などと同傾向である。後半の部分は、母に皆死ぬのだからと諭す第四、五連と、怖れてはいけないよと諭す第六連から第十連までから成っている。「秋風の歌」は二連が一組となって、秋風の訪れ、紅葉、落葉と進み、最後に第十一連の一連で止めている。この手法は、「一葉舟」詩群の「懐古」に近い。しかし、人間の力と比較して秋風の持続力に驚嘆する第九、十連には、この詩の主題のようなものが感じられ、その点では「ことしの夏」詩群の「与作の馬」にも近い。

「鶏」は、話の筋が「与作の馬」に近い。牝馬に出会うまでの与作と馬の仲に相当するのが、一番いの鶏である。「与作の馬」は「あしたの露を踏み分けて」「与作は馬に秣飼ふ」ところから始まっていたが、「鶏」は、この一番いの動きが始まるまでに八連を費やしている。即ち、夫妻の絵そのものような一番いであったことを述べる第一連から第五連までと、夜明けを告げる第六連から第八連までである。「鶏」の第九連は「与作の馬」の第五連に当たる位置を占める。<sup>(注九)</sup>敵鶏が登場してからの二十連だが、ここは牝鶏の態度に注目して、夫鶏の側に立っていることが示されている第十連から第二十連までと、妻鶏の揺れる心を描く第二十一連から第二十八連までの六連、妻鶏が敵鶏と番って帰って行く残り三連の三つに分けるのが宣さそうである。第十連から第二十連までは、戦いが始まる前の三連と激しい争いを描く五連、そして夫鶏の死を描く三連に更に細かく分けられそうである。「与作の馬」には主題が認められたが、この「鶏」も牝鶏をめ

ぐって激しく争う第十三連から第十七連までや、勝者に傾いて行く牝鶏の心を叙した第二十一連から第二十六連に、やはり、主題を認めて宣いのはなからうか。

十二月発行の『文学界』第四十八号に「うすごほり」という総題で、六篇の詩を発表している。この詩群には小詩群がなく、三号前の「草影虫語」詩群に戻った（短歌を含まないが）ようなところがある。また、「秋の夢」詩群の詩が「知るや君」以外は一連四行となっているように、この間、一連四行の詩への傾斜を深めて来ていたが、この「うすごほり」詩群は、「おえふ」「おくめ」「おきぬ」の三篇が一連四行となっているもの、「おさよ」は二行、「おつた」「おきぬ」は後述のように行数の変化する詩と多様になっている。この点も「草影虫語」詩群に戻ったようなところと言えようか。但し、連の数は、「草影虫語」詩群は全て三連に達していなかったが、この「うすごほり」詩群は全て四連以上と、この間の多連詩化の傾向を一段と進めている。

「うすごほり」詩群では「おきぬ」が最も少なく、四連で成っている。この詩は「みそらをかける猛鷲」が「うまれながらの盲目」として転生した「おきぬ」という「処女」の苦悩を詠じたものである。「おきぬ」の本性（転生）を説明した第一連から彼女の苦悩を語る第四連に向かつて、ほぼ起承転結の形で進んでいると言えよう。承にあたる第二連は六行となっていて、他の連の八行に対して、少し軽い扱いとなっている。このような

行数の変化は、後の「おきぬ」「おきく」にも見られて、「うすごほり」詩群の新機軸だったと考えられる。

「おきぬ」に次ぐのが「おつた」の六連である。この詩は、第二連から第五連までの四連が「若き聖のたまはく…なかれ かくいひたまふうれしさに…やとて…ば…かくも…ならば などは早くわれに告げこぬ」の繰り返しをもっていて、一部をなしている。従って、この詩は、「おつた」の身の上を語った第一連とこの四連、それから「若き聖」の「官能のめざめ」を語る第六連の三部構成となっている。「知恵の石」を秘すという行<sup>(五十三)</sup>動で纏める第六連は、他の連が十行であるのに対して八行である。又、第二連から第五連までの各連では「若き聖」が「おつた」の言動でころりと態度を変えてしまうのが印象的である。

次は九連から成る「おくめ」である。「おくめ」は、恋しい君に会う為に「親も捨てはてて」こちらの岸にやって来た「乙女」が、川に身を投じて渡ろうとするまでを描いた詩である。この詩は二連ずつが一組になって、恋の情を語って、最終連に至る。二連ずつが一組になってというのは、「一葉舟」詩群の「懐古」と同じである。しかし、第九連は一連だけで河を泳ぎ始めた「おくめ」を描き出す。これも前記行数の変化に類する工夫のように見える。

十二連から成る「おえふ」は、冒頭の第一連と終結部の第十連から第十三連までが枠を作って、その間に「夢路」に辿った青少年時代が語られている。この枠が、冒頭では峠から見下ろしている図、終結部では川岸から

川を見下ろしている図と変化しているのは、なかなか味わい深い。第二連から第九連までの「夢路」は、乙女となるまでの第二、三連と「おえふ」の疾風怒涛の時代を描く第四連から第九連までとから成っている。勿論、作者が描きたかったのはこの後者乙女の時代である。<sup>(注十四)</sup>

「おきく」は十七連、「おさよ」は二十五連の長詩である。「おきく」は奇数行が七音、偶数行は五音で、偶数行は奇数行より四字下げとなっている。「おきく」は、「女心の一途さ」<sup>(注十五)</sup>に男心の頼りにならなさを忠告する言葉を変えて詠じたものである。「女心の一途さ」は、第一連、第三連、第五・六連、第十連から第十四連までと次第に長く、具体的になって行く。対する忠告の言葉は、第二連、第四連、第七連から第九連まで、第十五連から第十七連までで、後半が「女心の一途さ」を説く言葉の連数と微妙にずれながら、しかし、全体では同数となっている。このように「女心の一途さ」を説く言葉に教訓を打ち付けるという方法は、前記「おつた」と「若き聖」の会話に通じるもので、これも「うすごほり」詩群の特徴的な技法と言えよう。「女心の一途さ」を説く言葉と忠告する言葉との連数が第五連以後ずれるのも、前記の新工夫であった。「おさよ」は四つの部分から成っている。第一の部分は、「おさよ」という「老嬢」<sup>(注十六)</sup>が「うれひ」を一杯抱えていることを述べた第一連から第六連までの部分である。ここは二連ずつが一对になっている。第二の部分は、その狂う心を笛に吹く第七連から第十四連までの部分である。ここも二連ずつが対になっていると考える。次は、「おさよ」が人の七情を吹く時の様子である。ここは、七

情がそれぞれ一連を占め、それを導入と纏めが包んでいる。このようにこの第十五連から第二十三連の部分は、他の部分と大きく異なる。最後は、「友」に笛を聴くように勧める第二十四、二十五の二連である。二連ずつが対になるところや七情を吹くところに力を入れているらしいところなど、「ことしの夏」詩群の「与作の馬」に連なる系列の詩と考えられる。

(未完)

(注一)「蟬」が北村透谷の「眠れる蝶」の第二連に習っていることが関良一氏「藤村詩の形成——『若菜集』以前の考察——」(『文学』昭和十八年二月・同一九年三月)で指摘されている。但し、本稿では、このような影響関係については言及しない。

(注二)注一で、「ことしの夏」詩群が全て七五調、「新しき星」「別離」「木曾川の猿」を除いて一連四行となっていることを以て「藤村調の確立」と指摘されている。本稿では、この「藤村調」についてはその推移に注目し、より細かに見て行く積もりである。

(注三)『文学界』誌では繰り返し記号「く」(二字分)を使っているの  
で、音数との間にズレが生じている。

(注四)『若菜集』に収載されなかったことについては、部分的にだが、この詩の形式が後の詩で利用されたことなども考えられる。

(注五)「秋のうた」について関良一氏は「第一節は秋のはじめ、第二節は秋のなかば、第三節は秋深きころ、という季節の推移も看取され



る」としている（『島崎藤村詩集』昭和四三年一月）。

（注六）浅井清、越智治雄、佐藤善也、野村喬、三好行雄氏『若菜集』の詞づかいと詩法、背景―藤村詩の解釈のために―」（『解釈と鑑賞』昭和三十三年三月）では一応「起承転結の形式」とされている。

しかし、第三、四連に難があるとされているので、筆者は二部構成と考えた。

（注七）島田謹二氏『日本における外国文学』上（昭和五〇年一二月）の第一章『若菜集』の成立に「第三、第四、第五聯というこの中心部」という捉え方が見える。

（注八）初出『文学界』は誤植で、第二連の第四行が第三連に行ってしまった。

（注九）山室静氏は、『新しき詩歌の時代』（昭和四四年二月）の「島崎藤村の詩」でこれを「心にくい構成」と評している。

（注十）注九の論考で山室氏は、第四連について「全体がみごとに焦点を得て結晶する」と評している。しかし、このことが本稿と対立するものとはかんがえていない。

（注十一）視点は異なるが、同様の捉え方が注七の論考に窺われる。

（注十二）注七の論考に「構成は大きく前後二つに分かれる。前半部九聯」という表現があるので、筆者と同じ分け方かと見ている。

（注十三）日本近代文学大系『藤村詩集』（昭和四六年一二月）の関良一氏の頭注から。

（注十四）「おえふ」の構成については拙稿『藤村詩集』の『序』に關して」（『鹿児島国語国文』創刊号 平成九年七月）の中で言及している。

（注十五）注十三に同じ。

（注十六）注十三に同じ。

（平成十六年五月十日 受理）